

保育士の成長と口頭詩の有効性

増田 修治

1. 「口頭詩」とは何か

教育の中で、子どもたちのつぶやきを聴き取るということは、かなり長い前から意識的に行うように提起されていた。昭和8年に刊行された『児童自由詩集成』（北原白秋刊）の解説には、次のように書かれている。¹

「—あの無心な幼児たちの折りに触れての片言の一つでも聴き逃さないでいたら、それがどんなにすばらしい詩をなしてあるか、一つ一つに光ってゐないことはないのに驚かすにはみられますまい。感覚の素朴と純真と、しかも凡ての感激が新鮮であり、驚異に充ち満ちてゐる故に、その言葉は生き、そのおのずからな韻律がそのままの詩の形を以て顕はれるのであります。その自然さは卵から生まれたばかりの小鳥の声のやうに無邪気で自由であります。」

北原白秋の言葉から読み取れるのは、「子どもは良きものであり、その言葉は幼いがゆえに新鮮で驚きに満ちている」ということである。だからといって、すぐに子どもたちのつぶやきを聴き取るということが広がっていったわけではない。

第二次世界大戦が終わり、日本に民主教育の風が入ってきた。その戦後の幼児教育の理論の中心となったのは、アメリカから入ってきた「新教育」と、戦前の大正期に「新教育」の伝統を守ってきた倉橋惣三らの理論が一体となったものであった。それは、遊びを中心として子どもを自由にのびのびと育てようとするものであり、今までの軍国主義的な教育を払拭する運動の力ともなった。

しかしながら、リアリズムの欠如という問題が指摘され、子どもの生活要求や願いをくみとる方法として生活綴方教育が広まっていった。その生活綴方運動から影響を受けて、1950年代のおわり頃、東京保育問題研究会が、「話し合い保育」ということを提唱するようになった。それは、幼児保育の実践に生活綴方教育運動の方法を適用したものであった。

1960年代後半には、集団組織論への関心が固まり、「集団づくり」が追求されることになっていった。こうした流れの中でも、「教育と生活の結合」という原則のもと、長野県幼年教育の会を中心として、「口頭詩」の運動が続いていったのである。

その運動は、1965年から1970年まで続き、1663編の詩が生まれた。それを編集委員会が

年齢別に分類し、その特徴を細分化していき、体系化していく中で一冊の本にまとまっていった。それが、1971年に発行された『口頭詩集 ひなどり』である。²

ところで、「口頭詩」とはなんであろうか。一言で言えば、「子どものつぶやき」である。しかし、その子どものつぶやきをそもそも「詩」と呼んでよいのだろうか。大人が書く「詩」は、かなり表現が練られ、研ぎ澄まされている。しかし、幼児に言葉を再創造させていくことは出来ない。だからこそ逆に、「子どものつぶやき」から保育士が学んでいこう、生活の中から出て来た言葉を聴き取ることを通して、私たち大人の側が変わっていこうという営みを含めて「口頭詩」と名付け、大人の詩と明確に区別したのである。

2. 新保育指針と口頭詩との関係

新保育指針（平成20年）の中の、1 保育のねらい及び方法の（2）教育に関わるねらい及び内容を読むと、エ言葉においては「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聴こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」と書いてある。また、次の項目の表現においては、「感じたことや考えたことを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と書いてある。³

こうした新保育指針を読むと、保育園における表現活動に力を入れていることと、小学校との連携を視野に入れていることが見てとれる。もちろん、保育園の表現活動を豊かにすることが、小学校の教育の基礎を創り出すことにつながることは想像できる。しかし、そうした表現活動の基礎となるのは、「聴き取られる喜び」であり、「聴き取ってもらえる他者の存在」である。その両者が存在した時、子どもたちの「人とつながることは気持ちが良いことだ」とか「話を聴いてもらえることや友だちとつながることが、心地良いことである」という情動を育てることにつながるのではないだろうか。

その情動を育てるのに、一番重要な役目をするのは、もちろん保育士である。その保育士が、子どもたちの表現の中心となる「つぶやき」を聴き逃しているとするなら、その意識を変化させることなしに、子どもの表現を育てていくことはできないのではないだろうか。

すでに紹介した通り、子どもたちのつぶやきを一番最初に集めたのは、長野県幼年教育の会が編集した『口頭詩集 ひなどり』である。² ここには、たくさんの子どものつぶやきが掲載されている。この詩集を読んだ時、私は幼い子どもの言葉の豊かさに驚くと共に、子どもの「口頭詩」を通して保育実践を考える場を創りたいと考えた。

3. 会の概要

保育士の中にも、子どもたちとどのような関係を築いたらいいのだろうかと悩んでいる人が非常に多くなってきている。また、「子どもの発達をとらえる」とは、具体的にどのよ

うにしていくことなのかということに、悩んでいる人も多くなってきている。それに追い打ちをかけるように、保育園の民営化の波が襲ってきている。この波は、「保育士なんて、たいした存在じゃないし、変わりなどいくらでもいる」というメッセージを含んで提案されている。その民営化の波に翻弄され、「子どもの発達をどのようにとらえ発展させていくか」という保育実践が展開しづらくなっている。そうした問いに答えると同時に、『ひなどり』に出てくるような「口頭詩」を生み出し、それをきっかけとしながら保育実践の中身を豊かにしていくことを中心課題として、私を含めた10名ほどのメンバーで2005年4月、「口頭詩と子どもの発達」研究会を立ち上げたのであった。

この「口頭詩と子どもの発達」研究会は、口頭詩を採取することのみが目的なのではなく、その営みを通して保育というものの在り方や質を変化させていく具体的な取り組みにしていくべきだと考えていた。なぜなら、保育士自身が新しい保育実践のあり方を考えるきっかけと具体例を提示したかったからである。具体的には、次の5点を追求したいと考えた。

- A, 子どもの口頭詩と発達の関係性
- B, 子どもの口頭詩から見えてくる子どもの心
- C, 口頭詩で表現される「人と人との関係性」→コミュニケーション
(言葉の背景)
- D, 口頭詩から見られる子どものドラマ
- E, 「声」は、聴き取られることによってはじめて「声」となる。子どもや親の「声」を聴き取ることを通して、保育という仕事や子どものおもしろさを改めて発見していく営みを広げていく。

4. 保育士が成長するとは？

よく「子どもと共に成長していく保育士」ということが言われる。しかし、保育士が成長するとは、どういうことを指すのだろうか。いや、そもそもどのような事柄をもって、保育士が成長したと言って良いのだろうか。

私は、次にあげるような事が起きた時に、「保育士が成長した」と言えるのではないかと考え、それを次のような10ヶ条にまとめてみた。

- (1) 子どもたちの何気ないつぶやきから「光る言葉」を聴き取り、それを記憶・記録することができるようになる。
- (2) 子どもたちのつぶやきをその子一人だけのものせず、他の子どもへと広げ、会話を広げていくことができるようになる。
- (3) 子どもの会話の波を読み、その波に合わせた言葉を保育士が発することによって、会話の波が次へ続き、会話の豊かさを創造することができるようになる。

- (4) 子どもの年齢に応じた的確な言葉を挿入することができ、子どものコミュニケーション能力の向上を図ることができる。
- (5) 子どものファンタジーの世界を共感・共有し、保育を楽しむことができる。
- (6) 子どものつぶやきを意識して読み取ることを通して、ズレのおもしろさに気付くことができる。
- (7) 人間の人格の一番大事な核（コア）となるものに気づき、それへの働きかけを通して、子どもの成長と保育士としての成長を促すことができる。
- (8) 子どもの会話を豊かにしていくための方法を自分なりに考え、実践していく中で子どもたちだけでも豊かな会話が展開していくようにしていくことができる。
- (9) 子どものつぶやき（口頭詩）を通して、子どもへの愛情を常に新しいものへと昇華していくことができるようになる。（愛情の再創造）
- (10) どんなに幼い子どもであっても、人格を持った存在であり、「子どもの権利条約」の主体者として育てていく方向で働きかけができるようになる。

5. 一人の女性保育士の成長に焦点をあてて

この研究紀要では、「口頭詩と子どもの発達」研究会」の2年半の取り組みの中で、一番変化・成長したと思われるK保育士という女性に焦点をあてて書いてみたい。

(1) K保育士について

K保育士は、昭和34年生まれの49歳である。保育短大卒業後の20歳から働きはじめ、今年で29年目となる。高校生の時は、短大に進まずそのまま会社に就職しようと考えていたそうだが、高校の同級生に療育園の訪問に何回か誘われるうちに、福祉に興味を持ち、困った人の役に立ちたいと思うようになったとのことであった。しかし、子ども対象の福祉施設に就職するには、保育士の資格をとる必要性を高校の先生に指摘され、短大に進学することとなった。

そして短大に進学し、保育園と乳児院の実習をするが、乳児院の実習では下働きの扱いをされたが、保育園では平等に扱ってもらい、子どもとの対応が楽しかったことから、保育士になることを決め公立保育園の試験を受けたところ、合格したため、保育士になったのである。しかし、福祉施設に行きたいという思いも消えず、勤務先の区立の福祉施設に入ろうと思っていたが、順番待ち状態であったため、保育園の仕事を続けていくうちにおもしろくなり、そのまま保育士を続けていくことになった。

(2) 研究会に入ったきっかけ

今の園に転勤し、3歳児クラスを担当していた。そのクラスの子どもたちは、気持を言葉

で表すのが上手く、またおもしろい事を話す子が多くいた。年度終わりに母親たちに、一年間書きためておいたつぶやきと会話を集めて「クラスだより」を作ったところ、非常に好評だったのである。それを見た当時の園長が、「口頭詩って知ってる？ こらからスタートする勉強会に行ってみない？」と声をかけてくれ、興味を持って参加したとのことであった。すると、会話を通して保育を振り返ることができ、続けて参加するようになったとのことであった。

6. K保育士が変わったきっかけになった出来事

K保育士が大きく変化・成長していったきっかけとなった出来事や実践として、第一にあげられるのは、次の記録である。それについて、少し詳細に検討してみたい。

(1) 豊かな成長を引き出す「仕掛け」をする

研究会が足踏した翌月の5月に、K保育士は次のようなレポートを持ってきてくれた。

きょうりゅう発見

よしお（男・4歳9ヶ月）

（きょうりゅう発見！ に大騒ぎの4人。4人は、「きょうりゅうにワナをかける」となわとびにフープを結びつけ、それをしかけています。その中の一人がよしお。）

前にうちにきょうりゅうが来た時は、お湯かけたよ。

みんな〈へえー〉

保育士〈きょうりゅう、なんて言ってた？〉

「濡れたー！」って言った。

みんな〈ワッハッハーと笑う。〉

前にうちにきょうりゅうが来た時は、牛乳かけたよ。

みんな〈へえー〉

保育士〈きょうりゅう、なんて言ってた？〉

「冷たーい！」って言った。

みんな〈ワッハッハーと笑う。〉

よしおは、このきょうりゅう発見遊びで、何気なく言ったひと言がみんなの「へえー」という感心につながったことが発見だったと思う。“自分の言った事でみんなが楽しそうに笑ってくれている”という経験…。心地よい雰囲気。一体感の空気が流れていてうれしかった。言葉を引き出すことを意識して聴いてみたことで、つなげていくことが出来た。

この報告に対して、私は次のようなコメントをした。

① 保育士の「恐竜、なんて言ってた？」の声がけがいい。それがみんなの笑いを作り出

すきっかけになっている。

- ② ファンタジーを広げていっていることと、実世界の区別がついていないのがおもしろい。
- ③ 恐竜発見の世界に入って、そのあと「へー」の会話が入ることで全体の話につながりが生まれている。
- ④ 幼い子ほど、うんと会話させる事が言葉の発達につながり、感性を育てることにもつながる。
- ⑤ 笑いは、人をつなげるし、ウキウキした経験にもなる。そうした経験を、たくさんさせることが現代の子どもにとって大事なことなのではないか。
- ⑥ この中に、自分と生活とのつながりが見られる言葉がある。それは、「前にうちにきょうりゅうが来た時は、お湯かけたよ。」「前にうちにきょうりゅうが来た時は、牛乳かけたよ。」の言葉。
- ⑦ まわりの子が笑ったら、子どもたちにどんな言葉をかけたらよかったのだろうか？ その言葉がけによって、子どもの会話がうんと楽しい遊びにもなる。
- ⑧ 現実とファンタジーのはざまで、大人も一緒にその中で遊ぶことが大切。

この例を見ると、「4. 保育士が成長するとは？」の中であげた10ヶ条の条件のうち、(1) (2) (3) (4) (5) の5つもの条件を満たしていることがわかる。今まで、1つというものはあったが、これだけ条件が揃った実践を提起してくれたのは、この時がはじめてであった。今までの学習の成果が、いっぺんに花開いたように感じた瞬間であった。

ここに見られるように、子どもの成長には、豊かな会話が必要なのである。しかし、その豊かな会話を創り出すためには、仕掛けをしていくことが必要なのだ。4- (3) で提起したように、会話には“会話の波”とでも呼ぶべきものがある。その会話が谷になる時に別の言葉が入ると、再び山に向かうことができるのである。この場合は、『恐竜、なんて言ってた？』という言葉になるのではないだろうか。

もし最後に『みんなだったら、何をかける？』と声かけをしたらどうだっただろうか？ きっと、次々に色々なことをしゃべってくれたはずである。そうした楽しい経験をさせ、それを家庭に持って帰らせることが、今の保育園には必要なのではないだろうか。子どもが、保育園でワクワクするような会話をする。その会話を子どもが家に持って帰る。あたかも、ふろしきからおみやげを取り出す時と同様に、心の中からその楽しさをひもとくような姿をひき出すことができれば最高なのではないだろうか。そうした積み重ねが、保育園と家庭とをつなげていくのだと思うのである。しかも、保育者と子どもと親の三者が、現実とファンタジーのはざままで一緒に遊ぶことができるのである。今の親たちにとって、他者は競争相手になってしまっている。そうした状況だからこそ、競争ではない形で親・子ども・保育者がつながっていくことが大切なのではないだろうか。この実践例は、そうしたことを展開していくものとして、優れているのではないだろうか。

K保育士は、この時のことを次のように総括している。

今までは、「子どもっておもしろい」で終わっていたつぶやきや会話ですが、そこに自分が入り、意図を持って会話をつなげる。そのことにより更に豊かになり、笑いが起きたり、クラスがいい雰囲気になる。この事例を通して、そのことを意識するようになりました。それも自分では無意識に言っていた自分の言葉を、「会話の山」と言ってもらえ、とらえ直しをしていただき、こういうことか〜と、実感してわかっていった感じです。

こうしたとらえ直しをしていくことによって、K保育士は更に子どもを深く捉えたり、子どもとの会話を楽しむ余裕が出てくるようになっていった。

(2) ズレのおもしろさを楽しむ

2005年7月の研究会で、K保育士が次のような口頭詩を紹介してくれた。

前日、めったに熱を出さないよしおが発熱して帰った。また、クラスでおたふくになる子どもも多く、ひろしはひどいおたふくになり、入院する経験もした。つぎは、ある日の4歳児の男児3人の会話。

よしお 「よし、きのう熱出たんだ ズ」

ゆうた 「それで帰ったんだよねえ〜」

ひろし 「ひろちゃんなんか、おたふくだったんだから」

よしお 「へえ〜、どのくらい？」

ひろし 「…5キロくらい…」

一 同 「ふ〜ん」

めったに熱など出さないよしおにとって、病気になって帰るのは、一大事だったに違いない。体温もきつと、何度もはかってもらったのだろう。たぶん、その「どのくらい？」だったのだと思う。ひろしは、それがピンとこず、何か量を言わなくては…と思ったようで、そのズレのおもしろさに思わず笑ってしまった。

研究会では、4-(6)の「会話のズレのおもしろさ」が取り上げられた。笑いの中の一つに「ズレのおもしろさ」というものがある。子どもたちは意識して会話をずらしているわけではないのだが、そのズレを大人の側（保育士）が楽しんでいるのがとてもすばらしいのではないだろうか。K保育士が、子どもの言葉に耳を傾けはじめている様子が見てとれる。

(3) 子どもへの愛しさを育む

2005年11月にK保育士が提案してくれた口頭詩は、次のようなものであった。

5才児クラスの出来事です。その日は、チューリップの球根を午前中に植えました。お昼寝から目覚めたさと子（5才1ヶ月）、ふとんからハイハイしながら出てきて、目を輝かせ…。

さと子 「もう、出たかな？」
 保育士 「…何が？」
 さと子 「チューリップ、もう出たかな？」
 保育士 「どうかな？ 大ちゃん（5才1ヶ月）どう思う？」
 だいき 「出てるよ、ジャックと豆の木みたいにニユルニユル伸びてるよ」
 （数日前に、職員劇「ジャックと豆の木」を見たばかりでした。）
 さと子 「花の上へのっちょおうかな～、さと。」
 3 人 一緒に笑った。

これに対してK保育士は、
 「昼寝しておきたら、芽が出ているだろう…と考えながら寝ついたのだろうな～と思うと、“かわいいなあー”と思いました。そして、目がさめてすぐ気にしていたところも。だいきが、先週見た劇と合わせて“豆の木みたいに”と言ったこと。子ども同士、同じものを見て感じ、（伸びたら）花の上へのっちょおうかなあ～と笑いあったのも、たぶんイメージできて、共感したのだと思います。」

と述べている。

口頭詩というものを通して、共感関係が生まれていることがとてもよくわかる。子どもの言葉に声を傾けるとは、子どもへの新しい愛情を生み出す力になる。そして、その新しい愛情に基づいた新しい視点を通して子どもを見ることで、さらに新しい愛情が生まれるのではないだろうか。新しい愛情を再創造する営み、それが保育なのだと思う。

(4) あいまいな言葉がイメージをつなげる！

2006年5月の研究会で、K保育士は誕生表を作った実践を紹介してくれた。

ホッとする時

5歳児（4月）

誕生表を作るために、自分の顔を描く活動をする。家を作り（紙で）、そこに自分が描いた顔をはろうと考えた。「家」を連想させようと思い、こう聴いてみた。

保育士 「みんなは、“ホッとするなー”と思うところ、ある？」

あきな 「あるよ～、温泉とか」

ひなた 「そう、ハワイアンズとかね」

たくみ 「電車の中とか…」

みどり 「車の中」

ひろき 「保育園！」

保育士 「保育園!! うれしいなあ～」

え み 「お風呂」

保育士 「お風呂に入ると、ホッとするよねえ～」

かのこ 「おうち！」（やっと出ました！）

保護者にも、この会話を聴いてもらったところ、ある母親が、「電車の中”ってわかります。出かけても、京浜東北線に乗って、蒲田が近づいてくると“ホッとしたね”と、つい親も言うことがあるんじゃないですかね」と。

単に「ホッとできるのは家」と思っていたが、子どもにとってはその一瞬一瞬いろんな場面でホッとするところがあるのだと思った。（出来上がった誕生表を見ると、えみは家の中でお風呂に入っている自分を作っていた。）

研究会が口頭詩に取り組んでいる意味が、この記録の中に十分表れているように思えるのである。保育士に限らず、教育という仕事を続け経験を積み積むほど、子どもたちをうまく動かしていく力量はついていく。しかし、逆に「子どもはこうあるべきだ！」といった“べきだ論”におちいりやすくなるのも確かなのではないだろうか。

K保育士は、「子どもにとってホッとする所は家であるはずだ」という前提で取り組みを進めている。しかし、その思い込みが違うことに、気がついていくのである。こうした柔軟さは見事としか言いようがない。保育という仕事への柔軟さは、子どもの言葉をとらえ直す中で生まれていくのだと思うのである。ここに、口頭詩を採取していく意味があるのではないだろうか。

K保育士は、「みんなは、“ホッとするな”と思うところ、ある？」と聴いている。この“ホッとするな”という言葉は、よくよく考えてみると非常にあいまいな言葉である。あいまいな言葉だからこそ、子どもたちのイメージが広がり、つながっていったのではないだろうか。子どもにとっての明確すぎる言葉は、イメージの狭さを生み出す可能性がある。時にはこうしたあいまいな言葉をわざと使うことで、子どものイメージを広げていくこともあっていいのではないだろうか。

K保育士は最後に、『「ホッとできるのは家』と思っていたが、子どもにとってはその一瞬一瞬いろんな場面でホッとするところがあるのだと思った。』と述べている。こうしたとらえ方をしていくことが、豊かな子ども観を創っていくのではないだろうか。また、えみちゃんが「家の中でお風呂に入っている自分を作った」とのこと。「誕生表を作るから、家の中に自分のかいた顔を貼ってね。」と指示したら生まれなかったに違いない。保育実践の豊かさ、保育士の認識変化が見事につながった記録だと言えるのではないだろうか。

(5) 人間としてのコアの部分をつくる（友だちとの別れを通して）

2006年5月の研究会で、K保育士はある子どものお別れ会についての記録を持ってきてくれた。ひびきという女の子が、家庭の事情から引っ越すことになった。その時の記録である。

友だちとの別れを通して

ひびきのお別れ会を行う。グループごとにひびきが喜ぶことを考える。などなぞを出題するグループ、ネックレスを作るグループ、お笑いをしたいという子がいる。

当日、各グループが出し物をした後、

「ひとりずつ、ひびきちゃんと握手をして、お別れの言葉を言おうね」

と私が言うと

「元気でね」

と言う子がほとんどだった。

会もそろそろまとめて、終わりにしようとする時、一人の男児、拓也（6才）の様子が…。

「拓也君、どうしたの？」

と近づくと、泣いていた。

「そうだよ。悲しいよね」

と肩を抱き振り返ると、ひびきも泣き出した。

「いいよ。ひびきちゃん、泣きたいんだよね。泣いていいんだよ。今日は思いっきり泣こう」

と、私も涙声になり伝える。

そのとたん、うあ〜んと、まわりの子も泣き出した。男の子も泣いている。痛くてもくやしくても泣いているところを今まで一度も見せたことのないみのり（女子6才）も、泣き顔をこちらに見せないように泣いている。“泣き”が止まらないので、

「みんな、ここ（胸）をなで降ろして、そろそろ涙を止めてごらん」

と言うと、

「さっき先生は、“思いっきり泣こう”って言った〜」

と、どこかから声がする。

と、どこかから声がする。

そのあと、子どもは泣きじゃくりながら

「ひびきちゃん、忘れないから」

「元気でね」

「ひびきちゃん、また会おうね」

と言葉をかける。

ひびきちゃんの腕にすがって泣いていたこうき（5才）は、

「つらい、つらい、お別れつらい」

「ひびきちゃん的笑顔が見たい」

「大人になっても忘れないから…」

と、泣きじゃくる。りさ（5才）・ひろみち（6才）も、

「大人になっても忘れないよ」

と声をかけ、泣く。

私は、儀礼的に

「お別れを言おう」

と言ったことが恥ずかしくなるくらい、「子どもからわき出てくる言葉は生きている」と感じた。切ないとか悲しいという感情を「つらい」と表現したこうきの純粋な気持ちに感動した場面だった。

私は、この記録を読んで胸が熱くなる思いだった。保育という仕事は、人間の喜怒哀楽の核になるコアを創る大事な仕事であることが、改めてわかったように思えた。4-（7）の条件がここに見事に現れている。保育という仕事は、そうしたコアを創る大切な仕事であることに、もっと誇りを持ってもらいたいと思った瞬間であった。

ここに出てくるこうきという男の子が、とてもステキだし、かわいいと思う。「つらい、つらい、お別れつらい」というこうきの言葉は、短いけれど立派な口頭詩だと思うのである。

7. 子どもに決定権を与える保育（「子どもの権利条約」の主体者として）

2007年9月の研究会で、K保育士が「うなぎ」をめぐる子ども達の口頭詩の記録を持ってきてくれた。

「うなぎ」を見ながら…

栄養士がうなぎを保育園に持って来てくれた。次の日の早番での会話…

（タライに入っているうなぎを三人の年長男児が囲んでいる。）

ようた 「うなぎって海の神様なんだよ、日本じゃなくてどっかの国の」

りゅうじ 「でも、図鑑にそんなこと書いてなかったよ」

たいし 「神様って天にいるんじゃないの？」

りゅうじ 「神様だったらくじらだよ、大きいから」

ようた 「でもパパが言ってたよ」

（間があった）

ようた 「このうなぎ食べられるのかな？」

たいし 「毒があるかもしれないよ」

りゅうじ 「このうなぎ、食べなかったら責任取って育てなきゃね」

保育士 「餌は何を食べるの？」
「ないよ」「ない」……と口々に言う。

たいし 「明日死んだらどうする？」
(登園し、この会話を聴いていたたくやが入って来た。)

たくや 「メダカの餌がある！」

保育士 「うなぎにメダカの餌でいいの？」

りゅうじ 「うなぎの餌はメダカなのね、だからメダカの餌をあげればいいんだよ」
(たくやが自分のクラスから餌を持ってきてあげた。)

たいし 「食べた！ これ、空組で飼いたい」

りゅうじ 「先生、飼っていい？」

保育士 「先生、決められないな～」

おもむろに、たいしはそこで一緒に見ていた自分の妹(3歳クラス)に向かって、「ジャンケンポン」と、勝負し、勝った。次に4歳クラスの子に向かい、また「ジャンケンポン」と仕掛けて、勝ち…。

たいし 「やったー！ 空組で飼うー！」
(年長の他3人大喜び。3、4歳児クラスの2人はポカーンとしていた。)

この口頭詩の記録を読んだあと、研究会のメンバーがすかさず『先生、決められないな～』という言葉で、どうして言ったの?』と聴いた。しばらく考えてから、K保育士は『どうとでもとれる言葉を言ったらどうなるかな?』と、日々の保育の中で思うようになったからだと思います』と答えた。

この記録の中の保育士の「先生、決められないな～」という言葉は、「子どもたちに自己決定権を与える言葉!」なのだと思う。こうした言葉を保育士が意識的に使っていくことが、実は大切なのではないだろうか。なぜなら、「自分で物事を決定する」ということが自己肯定感を育てるからである。そんな「自己決定権をあたえる場面を作ったり、言葉がけを意図的にしていくこと」が、保育の質を変えていくことになるのだと思うのである。保育の質を変えるとは、そんなに大げさに考えるのではなく、日々のささいな保育を意図的にするという事なのではないだろうか。そしてそのことが、子どもを変化・成長させていく力になっていくのだと思うのである。

8. 親とつながる保育

K保育士は、2006年12月の研究会に「そらぐみだより」という5歳児のクラス便りを持っ

てきてくれた。これは、一人ひとりの子どもが宝物を持ってきて、それをみんなの前で説明したり自慢したりするものである。(紙面の都合上、21人中4人だけ紹介したい)

そらぐみだより

ーぼくの！ わたしの！ 宝物ですー

友だちの話を聴く、友だちに自分のことを話す ことをねらいにして今日、「宝物」を自慢する活動を行いました。「何を持って来ようかな？」とかなり迷ったり、悩んだりしたようですね。お母さん方が子どもたちの気持ちをくんで相談にのって下さったんだろうなーという事が伝わってきました。ご協力、どうもありがとうございました。おかげさまで、とっても楽しい活動となり、すぐご報告したくなりました。

◎自分の大のお気に入りをお話すんですから、約束やルールなんてなしで、自由にその宝について話してもらいました。ただし！ 聴く人は“しゃべらない”です。

- 1, みどり …赤ちゃんの時からのお気に入りのキティちゃんのハンカチ
○お母さんが買ってきてくれたハンカチだそうです。朝実は、キラキラの宝を持ってくる途中、落としてしまったという悲しい事件もありました。なので、いつも持っているこのハンカチのことを話してくれました。
- 2, だいすけ…小さい頃の自分の写真
○写真をみんなに見せると「わ～、かわいい」と。何枚か持ってきて、どれも気に入っている様子です。自分でもいとおしそうに見ていました。
- 3, きょうこ…毎日使っているまくら
○「このまくらはよく眠れる」と言いました。うみ組から使い始めた手放せないまくらだそうです。
- 4, あいり …みんなの(空組)の名前が書いてあるノート
○「大きくなっても忘れないように、みんなの名前を書きました」とのこと。中には、保育園の先生の名前や好きな歌もありました。

読んでみると、どれも本当にいいのである。あいりちゃんなんて、「みんなの名前が書いてあるノート」を持ってきて、「大きくなっても忘れないように」との理由を語ってくれたのである。なんて可愛い子なのだろうと思う。当然、保育園を卒園して少しすれば、忘れてしまうだろうが、それでいいのだと思う。子どもはいつも前に生きる存在なのだから…。ただ、こうした思いを持っていた瞬間が写真のように子どもの心には記録されていくのだと思う。そして、それが年月を経て沈殿していきながら、その子の性格の一部となっていくのではないだろうか。

この「そらぐみだより」は、親からの反応がすごく良かったのだそう。もちろん、子どもの宝物とそれにまつわる思いが書かれていたからというのはあるのだが、それ以上に

親の関心を引いたのは、子どもとの会話を記録した次のような部分だったそうである。

私が、祖母の話の発表をしていた時のこと

たくみ君 「先生、子どもいないの？」
 えみちゃん 「先生、独身だからいないよ」
 私 「ハイ、結婚していません」
 ゆいこちゃん 「先生、結婚し忘れたんだよね」
 ゆうき君 「先生、小学生の時の友だちにたのみなよ」
 私 「みんな、もう結婚していると思うけど…」
 ゆうし君 「聞いてみなよ」
 私 「ハイ、でももう赤ちゃんはムリかも」
 たくみ君 「45歳だから？」（なぜ？ ジャガー横田の出産があったからかも？）
 あきなちゃん 「そんなことないよ。この前TVで見たんだけど、おじいさんとおばあさんに赤ちゃんができたんだって～」
 私 「そうなんだ」
 なおちゃん 「結婚しなくても赤ちゃんは産めるよ、14歳の母とか」
 ほのかちゃん 「赤ちゃんが欲しくても産めない人もいるよ」
 私 「そうだよね～」
 えみちゃん 「大丈夫、先生、若いよ」 …と励まされ、終わりました。

私は、K保育士の穏やかで余裕のある受け答えに、うれしくなった。親たちは、担任の先生のことを知りたかったのと同時に、担任の先生がプライベートな部分を通信に書いてくれたことで相談しやすくなったのかもしれない。もちろん、こんな会話をしなくてはいけないということではないが、親だって、担任の素の部分が見えたら安心するのではないだろうか。

9. 他者の実践から学ぶ

(1) ホワイトボードの実践

研究会で、ある男性保育士が、1歳児の親たちの連絡帳を使って、親とつながりを深めていく実践を展開してみせてくれた。それをヒントに、K保育士は、ホワイトボードの実践を展開していった。

どの園でも、入り口に小さなホワイトボードがある。そこには、「今日は、水遊びをしました」とか「散歩でたくさんのお車を見ました」などと、一日にあった出来事についておおざっぱな紹介がされている。そんなホワイトボードに、K保育士は「子どもたちの口頭詩」

を掲載するようにしたのである。その結果、たくさんの父母がホワイトボードを見るようになると同時に、それが会話を広げる糸口になっていったそうである。中には、携帯の写メで撮影していく方もいたとのこと。

今の親たちは、子どもの良さを確認したいのではないだろうか。大変な思いを抱えながら保育園に預けている父母の方々の中には、「子どもって大変だし、手間暇がかかってイヤだ!」と思っている方もいるのではないだろうか。そんな父母の方々に、「ホワイトボードに子どもの口頭詩を紹介する」ことで、子どもの良さが伝わっていったのだと思うのである。

10. まとめとして

K保育士は、この口頭詩の会に参加してからの変化を次のように言っている。

- (1) 子どもたちの声を聴き取ろうという意識が自分の中に強くなった。
- (2) 自分の声かけによって、子どもたちから湧き出る言葉が変化をしていくことを感じ、記録にしてみると、「こう言えばよかった」「ここでこう言わなかったらどうなっていたか」と思い返すきっかけとなった。
- (3) 研究会を通して、その中の中心ではない子の小さい一言やしぐさのひとつからも深く読み取ってもらえたことで、私の子どもへの見方が根底から変わっていった。
- (4) 増田先生から自分の実践を整理して噛み砕いて頂くことで、そこから広がって見えて来るものや再確認に、「もっともっとアンテナを張りながら、柔軟な心で子どもたちの前に立たなくては」と思うようになった。
- (5) 周りの職員とも一緒に、「今の子どもの言葉、どう思った?」と考え合い、話し合えるような自分になったことが、一番の成長だと思う。

どの言葉からも、確かな成長の足跡を感じることができる。しかし、保育という仕事は日々迷ったり悩んだりして、揺れ動く仕事である。私は「揺れ動いていい!そうして“機微”がわかってくるし、成長させてもらえるのだ」と思っている。K保育士の記録を通して、子どもの口頭詩(つぶやき)を聴くという行為を通して、保育士が成長していく姿がみえたのではないだろうか。

私たちが一番幸せを感じる瞬間は、「子どもとのつながりが、保育士である自分を人間として豊かにしてくれる」と思える時だと思うのである。そんな瞬間は、待っていてもなかなかやってくない。あるいは、その瞬間が目の前に展開されたとしても、それに気がつかなければもったいない話だと思うのである。

私たちは、なにをおいても、心の育ちを大切にしたいと思うのである。ハーバード大学のC・W・エリオット博士が総長を退官する際の卒業式での式辞は、次のようなものであった。

「ハーバード大学を卒業していく諸君よ。自分のことをあまり考えすぎないで、他の人についていつも配慮できることが習慣付けられた青年になり給え。このことは、あなたに報いをもたらすであろう。」⁴

なんとすばらしい言葉なのだろうと思う。もちろん、私自身だって、この言葉のように行動できる自信などない。しかし、子どもと共に学びながら、その境地に近づいていく努力はしたいものである。

<注>

- 1 北原白秋著『児童自由詩集成』 昭和8年
- 2 長野県幼年教育の会編『ひなどりー口頭詩集』 鳩の森書房 1971年7月
- 3 無藤隆・民秋言著『幼稚園教育要領・保育所保育指針ガイドブック』 フレーベル館
2008年5月 92頁～98頁
- 4 日野原重明著『生きるのが楽しくなる15の習慣』 講談社α文庫 2005年6月

ますだ しゅうじ（臨床教育学）